「それでは、お前達はすぐに風呂を使ってきなさい。彼の着替えも用意させよう。そして部屋も準備させねば」
「彼の部屋は私と一緒で結構です」
「デューイ」
「トナエ、一人の部屋と私と同室と、どちらがいい？」
また勝手に、と咎(とが)められて彼は俺に訊いた。
本当は一人でゆっくりしたいが、彼に聞きたいこともあるし、ボロが出ても困る。それに恋人を名乗るなら同室の方がいいだろう。
「お許しいただけるのでしたら、一人では心細いのでデューイと一緒がいいです」
「わかりました。ではそのように整えましょう」
「それからあの……、この服は捨てないで取っておいて欲しいのです。それから、靴も」
「わかりました」
お義父さんは頷くとベルを鳴らして侍従を呼んだ。
「二人に風呂と着替えを」
こうして、俺のラスソルド侯爵家での生活が始まった。

帰って来るとすぐに抱擁、フォンド夫妻が来ている時には抱き寄せてキス。オマケに、ルネと離れて長いからか、ベッドで寝ていると抱き着いてきたりもする。

俺は同性との恋愛を考えたことのない人間だったのだが、このままだと毒されていくような気がする……。

もう既に、彼にキスされたり抱き寄せられたりすることに緊張しなくなっているし。

でも、唇へのキスはまだ許さなかった。いや、もう既に二度許してるんだけど、三度目はさせていない。

一度、覚えてないのかもしれないけれど約束破ったんですよ、ときつく叱ってからは、彼も注意してくれてるみたいだ。

けれど唇にはしなくなった分、耳朶(じだ)や首にキスされるし、キスマークを付けられたこともあった。

私室で二人きりになった時、キスマークはやり過ぎだ、と怒りはしたのだが、彼からそれは我慢して欲しいと言われた。

「実は、寝室に乱れがないことでフレル夫人に怪しまれたのだ」

寝室の乱れ……。つまりHした痕跡がないってことか。そんなとこまでチェックするなよ、と言いたいが、彼女としては大問題なのだろう。

「だめだ」
意外なほど強い口調で食い気味に否定される。
「明日もトナエがこの腕の中にいる保証がない」
「いや、ちゃんと妻になるって返事をしたんですから逃げたりは……」
多分しないと思います。
「違う。わけのわからない召喚術なんてもので呼び出されたのだ、わけがわからないまま戻ってしまうかもしれない。聖女には、聖女という役割があってこの世界に繋ぎ留められているのかもしれないが、トナエは以前お前が言ったようにここにいる意味がない、理由がない。私はずっとそれが怖かった」
右手が、また胸を探る。
でも今、心臓がドキドキして痛いのは、そのせいじゃない。
「だからお前がここにいる意味を与えたい。私がトナエを愛しているからここに残れと。今我慢をして、明日いなくなったら後悔しきれない」
今夜寝て、明日起きたら実家の自分の部屋のベッドだったら、俺は泣くだろう。
デューイと二度と会えなくなったら、寂しくて、悲しくて、どうして恥ずかしいなんて理由で拒んだのかと後悔するだろう。